

## 翻訳にあたってのヒント

### その 67

#### quite について

英語の副詞として頻繁にお目にかかるこの単語は、非常にやっかいだ。多くの場合「かなりの、まったくの、相当な、大変な、すっかり、まったく、完全に、ほんとうに」といった意味で使われることが多いのだが、これとは対照的に「なかなか、まあまあ、ほどほどに、多少、どちらかといえば」といったような冷笑的・皮肉的な意味合いで使われることもあるからだ。前者の意味では「**entirely, thoroughly, completely, truly**」といった副詞があてはまり、後者の意味では「**somewhat** または **rather**」といった副詞があてはまるといえよう。また「**quite a ...**」と「**a quite ...**」の形で使われることも多く、どちらも同じ意味であることもあれば、多少違ったニュアンスで用いられることもある。また文法学者によっても意見が分かれているようでもあり、かなりのくせ者である。

例えば、次のような文があるとする。

**It was quite a loss for the Japanese economy.** そのことは、日本経済にとってかなりの損害であった。

この場合、「**a quite loss**」という形は使えない。なぜなら、すでに説明した通り **quite** はあくまでも副詞であり名詞を直接修飾する形容詞として使うことができず、「**a loss**」という句全体を修飾している副詞であるからだ。しかしその意味合いからすると、この句は「**a quite great loss**」と言い換えることも可能であり、そういった意味で使われていると考えられる。そうは言いつつ、この場合でも「**quite a great loss**」としたほうが自然な英語であると言われている。

また、「かなりの」という意味があることから、「**very ...**」に置き換えればいいじゃないか？という意見も聞こえてきそうだが、そうもいかないようである。単に客観的な事実を述べるだけなら「**very**」は使えるが、「**quite**」を使った文には話者や書き手の主観が盛り込まれているからだという。さらに、「かなり」の意味合いの副詞として「**fairly** や **pretty**」も使えるが、不定冠詞を伴う場合には、「**quite**」をその前に置くのが普通とされているという問題もある。(以下例文)

**It is quite an interesting story.** それはとても面白い話だ。

「**quite a ...**」の句でおなじみのものは、中学時代に習った「多数の～」を示す「**quite a few**」句であろう。

例文： **We also provides quite a few products in the environment-related sectors.** 当社は、環境関連分野においても数多くの製品を提供しております。

最後に、この単語のニュアンスを少しでもつかめるものとして、以下の例文をあげて今回はしめくくりにしよう。

We develop and provide those materials that can meet the needs for quite a long-term durability. 当社は、超高耐久ニーズに応える素材を開発・提供しています。

In the our nuclear power division, high interest rates and tight restrictions on financing rendered the domestic operating environment quite severe. 原子力部門では、高金利および緊縮財務のため、国内経営環境はまことに厳しいものでありました。

以上述べたように「quite」のニュアンスを汲んで翻訳するにあたっては、いろいろな生の英語を日頃から参照して応用していくしかないといえそうだ。これを機会に「very」の一点張りで通した英語ばかりを書いていた人（何？私じゃないって？）は、変化をつけるよう工夫してみては？

以上これにて第 67 回目終わり。